

Title	大阪大学アーカイブズニュースレター 第14号
Author(s)	
Citation	大阪大学アーカイブズニュースレター. 2019, 14, p. 1-12
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/73344
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

目次：

阪急電鉄石橋駅	1	受贈刊行物（2019年3月～8月）	9
大阪大学における年史編纂	2	業務日誌（抄）（2019年3月～8月）	11
書評：『公文書をアーカイブする — 事実は記録されている—』	5	利用案内 等	12
大阪大学社学共創連続セミナー第4回の開催	8		



阪急電鉄石橋駅

来る2019（令和元）年10月1日から阪急電鉄石橋駅が石橋阪大前駅に名称変更されます。その理由は、「石橋駅周辺のさらなる活性化と大阪府北部の北摂地域の価値向上を図るため」とのことです。

石橋駅は、阪急電鉄前身の箕面有馬電気軌道が1910（明治43）年に開業した当時からある駅名です。現在の阪大生同様、旧制浪速高等学校の生徒も利用していました。（菅 真城）

大阪大学における年史編纂

大阪大学共創機構社学共創本部 教授 菅 真城

はじめに

多くの大学では、創立〇〇周年を記念して、大学沿革史（年史）が編纂されてきた。国内で最も多く大学沿革史を所蔵していると考えられる財団法人野間教育研究所には、2007年末時点で2,765冊が所蔵されている（学校沿革史研究会『学校沿革史の研究 総説』野間教育研究所紀要第47集、2008年）。大阪大学においても、これまで数次の年史編纂が行われてきた。本稿では、大阪大学における年史編纂のあり方を概観しておきたい。

1. 大阪帝国大学創立史

大阪大学における最初の年史編纂は、西尾幾治編『大阪帝国大学創立史』（恵済団、1935年）である。A5版413頁。西尾は大阪帝国大学初代事務官（事務官とは今でいうところの事務局長）。元大阪府立大阪医科大学幹事であり、国立総合大学設立に尽力してきた人物である。本書は西尾一人が資料を取りまとめ、一部は執務日誌を基に執筆して刊行したものである。「巻頭言」には以下のように記されている（旧字体は新字体に改めた）。

顧みるに、不肖さきに大阪府理事官として、医科大学火災復旧の事務を担当し、その後本学幹事に転じ、前後二十年間直接間接に本学財政事務に干与すると共に、楠本学長指導の下に終始帝大移管事務を担当せしにより、将来本学創立の沿革を知らんとするものゝ参考資料に供するため、予てその概要を蒐集し置きたり。

偶々財団法人恵済団に於ては、其事業として大阪帝国大学創立の沿革を後世に伝へ以て奨学の趣旨に副ひ、兼て温故知新の目的を達せんとし、不肖の蒐集せしこの記録を大阪帝国大学創立史として上梓せらるゝに到りたるは、洵に望外の光榮にして、今や本学の益々隆昌を祈るや切なり。

本書は財団法人恵済団から非売品として刊行された。財団法人恵済団は、大阪医科大学病院



関係者により、医学研究の奨励と患者に対する救済等を目的として1922年に設立された財団である。本書はその多くが関係者に配布されたものと思われる。創設の経緯を記録することで、今後の大学の発展を見据えていたことがうかがえる。

本書に収録された資料のなかには、現在では原本が紛失したものもあり、資料的価値が高い。

2004年には大阪大学出版会から復刻版が刊行された。

2. 大阪大学二十五年誌

大阪大学自身による最初の公式な年史編纂は、『大阪大学二十五年誌』（1956年、大阪大学）である。全1巻、A5版641頁。

「編集後記」によると、1955年5月18日の評議会で、1966年の秋に大阪大学創立25周年記念式典を催すことが決定され、実行委員が各学部から選出された。55年7月6日に第1回記念事業計画委員会が開かれ、式典事業の一つとして大阪大学25年誌を刊行することになり、記念誌編集委員会が組織された。大阪帝国大学が創立された1931年5月1日を大阪大学の創立日としたのであった。

『25年誌』は、1、各講座別に責任者を選出し、各部局ごとに部会を組織し、部局委員がそれぞれの部局部会を統括する、2、全般にわた

る記述は本部および各部局の庶務が担当し、各講座に関する記述はそれぞれの講座選出の委員が担当する、という方針で書かれた。いわゆる「通史」にあたる第1章総記第1節概観のうち「沿革」については全11頁の簡単な記述であり、残りの頁の大部分はいわゆる「部局史」である。

時の総長正田建次郎は、「序」で本書刊行の意義について以下のように述べている。

大阪大学が大阪市民の要望により、その絶大な期待を担って、昭和6年に誕生してから今年で丁度25年になります。適塾以来の輝かしい伝統と若々しい熱意をもって、苦難の多いこの25年を発展の一路をたどりながら乗り越えてきました。今日過去の四半世紀を省みると、そこに大きな誇りを感じるとともに幾多の反省すべき点を認めざるを得ません。

こゝに記念事業の一つとしてこの25年誌の編さんを企てたのは、本学の過去及び現在の実体を忠実に写し出すことが、私共の本学に対する自信と反省の資となるとともに、今日までに寄せられた各方面の援助に対して感謝の意を表す途であると信じたからであります。従って本誌は大学本来の二つの使命にそって大学がどのようなことを成し遂げたか、また現在どのような状態にあるかの報告書のような形式をとりました。

「沿革史を書くと言う作業は、非常に息の長い自己点検作業の一つです。」(寺崎昌男『大学は歴史の思想で変わる－FD・評価・私学－』東信堂、2006年)という指摘があるが、『25年誌』には既に自己点検の要素が見て取れる。

3. 大阪大学五十年史

大阪大学におけるこれまでで最も大規模かつ本格的な年史編纂は、大阪大学五十年史編纂事業である。1977年9月の部局長会議において、4年後に迫った創立50周年の記念事業等について予備的な相談をするため、創立50周年記念事業準備委員会(仮称)を設置することが承認され、同委員会が同年11月に発足した。創立50周年記念事業の一つとして「五十年史」を刊行するという事は第1回の準備委員会で大方の賛同するところとなり、具体的な審議が開始された。準備委員会は計3回の会合を持ち、大阪大学創立五十周年記念事業委員会とその下部組織としての大阪大学五十年史編集実行委員会の規

程案の審議を完了して発展的に解散した。両規程は、部局長会議、評議会の議を経て、それぞれ1979年2月および3月に施行された。同年4月には第1回の大阪大学五十年史編集実行委員会が開催され、委員構成が確定した。同年7月には大阪大学五十年史資料・編集室が設置され、本格的な年史編纂活動を開始した。この五十年史の内容としては、通史、部局史、写真集の三本立て構成とすることで当初から意見の一致を見た。そして、『写真集 大阪大学の五十年』(1981年)、『大阪大学五十年史 部局史』(1983年)、『大阪大学五十年史 通史』(1985年)の3冊の書籍が刊行された。

『写真集 大阪大学の五十年』は187頁。写真集は1981年5月1日の創立50周年記念式典日までに刊行することが要請されていたので、1979年5月に大阪大学五十年史編集実行委員会の中に写真集小委員会が設けられ、この委員会のもとで編集作業が行われた。掲載写真は約700枚。この写真集のために提供された写真は2,000枚を超え、現在は大阪大学アーカイブズが所蔵している。

『大阪大学五十年史 部局史』はB5版987頁。編集は大阪大学五十年史編集実行委員会であるが、各部局においては部局編集委員会が組織された。当初は2巻の予定であったが1巻になり、予定より1年遅れで刊行された。

『大阪大学五十年史 通史』はB5版568頁。目次案については五十年史編集実行委員会発足と同時に検討が始められたが、1981年4月に編集実行委員会の中に通史編集委員会を置き、また、通史執筆委員会も置かれた。執筆者は37名に及ぶ。執筆者名は巻末に記載されているが、執筆分担は分からない。また、注が付されていないので、出典が分からない。

大阪大学五十年史編纂で忘れてはならないことは、『大阪大学史紀要』を4号(1981～1987年)刊行したことである。この紀要は、五十年史の内容の充実と編集作業のより円滑な進行を期すために刊行された。

この時代の大学史編纂では、通史編、資料編、紀要が3点セットと言われたが(羽田貴史「戦後大学史記述のポイントについて」『広島大学史紀要』第2号、2000年)、大阪大学では資料編が刊行されることはなかった。

また、編纂終了後、関係者は大学資料館の設置を求めたが、それが実現することはなかった。編纂資料は、その後附属図書館に収められ

たが、現在は大阪大学アーカイブズが所蔵している。

4. その後

創立五十周年の後、大阪大学の周年事業は10年ごとに行われている。

創立60周年にあたっては、大阪大学紹介誌編集実行委員会企画・編集で、『OSAKA UNIVERSITY 60』が1991年に刊行されている。180頁。同書は、「PAST（大阪大学創立60年の歩み）」と「NOW&FUTURE（大阪大学の現状と未来）」の2部構成で、年史というよりも要覧に近い。

創立70周年にあたっては、2001年に大阪大学創立70周年記念出版実行委員会編で『大阪大学創立70周年記念写真集』が刊行された。137頁。「編集後記」によると、編集方針は「第一に、60周年以降の10年間の正確な記録を残し80周年さらには100周年記念へと繋げる、第二に、単に過去の記録を整理保存するだけでなく21世紀に向けて大学から夢のある情報発信を行うことである。」とある。新たな歴史研究が行われることはなかった。

10年ごとに周年記念を行うようになったためであろうか、『大阪大学七十五年史』が編纂されることはなかった。

創立80周年にあたっては記念誌の刊行が計画されたが、東日本大震災の影響があって実現することはなかった。

現在は、2021年の大阪大学創立90周年・大阪外国語大学創立100周年に向けて、大阪大学創立90周年・大阪外国語大学創立100周年記念事業委員会が立ち上がっており（2016年12月11日に大阪大学創立90周年・大阪外国語大学創立100周年記念事業委員会規程制定）、その下に記念出版・展示実行委員会が置かれている。

『百年史に向けた帝国大学前史』（仮称）の編纂がなされているが、これは総長の意向で退職教員1人に依頼しており、全学を挙げた体制とはなっていない。

5. 大阪外国語大学の年史

2007年に大阪大学と統合した大阪外国語大学の年史にも触れておこう。外大の場合、同窓会（咲耶会）の影響が無視できない。

1989年には、大阪外国語大学同窓会編集・発行で、『大阪外国語大学70年史・資料集』が刊行されている。233頁。「まえがき」には、

「近く開学七十周年を迎えるに当たり、大学の七十年史を編纂することは、大学の史実を後世に伝えるとともに、同窓諸兄姉の想出の絆となると思う。その意味において大学の年史編纂に同窓会として協力することを二年前に決定して同窓諸兄姉にお願いして写真、文書、アンケート又はインタビュー等によりその資料を蒐集してきた次第である。」とある。同書は、「第一部インタビュー編」、「第二部 寄稿編」、「第三部 写真編」の3部構成である。

1992年には、大阪外国語大学70年史編集委員会編集・大阪外国語大学70年史刊行会発行で『大阪外国語大学70年史』が刊行されている。B5版763頁。編集委員会は組織されたが、同窓会の要望に応える形で、大学の公的な行事として全学で取り組むという体制は作られていなかった。執筆は大学教員ではなく新聞記者の手による。

おわりに

2031年には、大阪大学創立100周年を迎える。この時には、『大阪大学百年史』が編纂されると予想される。『七十五年史』が編纂されなかったので、50年、半世紀ぶりの編纂事業である。一挙に50年の空白を埋めるには相当な困難が伴うであろう。阿部武司元文書館設置準備室長が「大学史の編纂と文書館」（阿部武司「大学史の編纂と文書館」『大阪大学文書館設置準備室だより』第6号、2010年）で述べられたことの繰り返しになるが、年史編纂においては、10年の歴史をまとめるには1年かかると言われることがある。そうすると阪大百年史編纂のためには10年の年月が必要ということになる。百年史の編纂は2020年代初頭には始めなければならない。その際、アーカイブズとは別個の独立した編集委員会が組織される必要がある。アーカイブズとその教職員は百年史のための資料を提供する存在であり、ライター陣（百年史編集委員会・百年史編集室）は別に組織されなければならない。両者の役割は別個のものであるが、アーカイブズと編集委員会・編集室が共働することで、素晴らしい『大阪大学百年史』が完成することを願っている。

書評:小川千代子・菅真城・大西愛編

『公文書をアーカイブするー事實は記録されているー』

大阪大学出版会、2019年7月、1,800円+税

大阪大学 名誉教授・国士館大学政経学部 教授 阿部 武司

近年、日本政府の「悪意ある行為」により公文書管理に対する信頼が失墜しているなかで、本書は、こうした事態を憂慮する日本の代表的アーキビスト3氏が公文書管理の重要性を世に訴えるために編集した好著である。

「第一章 国と地方公共団体の公文書」は、日本の政府と地方自治体の公文書管理の実態が示される。まず「1 国の公文書と国立公文書館」(菅真城)では、公文書をめぐる近年の不祥事をだれもが知っているにもかかわらず、それらが侵害した情報公開法(2001年施行)や公文書管理法(2011年4月施行)についてはほとんど知られていない現実が示されたのち、「公文書等」の定義とその作成・保存・評価選別・移管先など公文書管理法の要点がわかりやすく紹介される。さらに、公文書を保存・公開する国立公文書館について利用法も含めて丁寧に解説される。

同章「2 鳥取県立公文書館の理念とその制度整備」(小川千代子)では、国とは独自の公文書管理制度を持つことを特徴とする地方自治体のうち、鳥取県の事例が紹介される。同県では公文書管理法の施行後まもない2011年に情報公開と事務効率化とを目的とし、公文書の統一的管理・保存・利用を定めた公文書管理条例、2016年に「県下の市町村との提携・協力体制を確保しようとする理念」(23ページ)を盛り込んだ「歴史資料保存条例」が、それぞれ制定されたことが述べられたのち、評価選別に関して、国と同じく実施機関が方針を定めているが、とくに引き継がない文書を具体的に示すことにより、「評価選別作業に要する時間を可能な限り短縮し、担当者が判断を定めるまでの迷いを軽減する」(27ページ)ことが図られている点が注目され、実務上優れたルールとして評価されている。

同章「3 板橋区公文書館の公文書移管と公開」(元ナミ)は、府県よりもさらに小規模な地方自治体である東京都23特別区の「板橋区で



公文書が歴史的に貴重であると判断され、住民に公開されていく過程を紹介」(33ページ)している。同区では国の情報公開法に先立って1985年に公文書公開条例が制定され、公文書の閲覧がある程度できることになったが、その後、区史編纂事業で集められた文書の公開問題を契機として2000年に、前記の条例が全面改正され、新たに定められた公文書館条例に基づく板橋区公文書館が設立されたことにより資料閲覧が容易になった。板橋区でも鳥取県と同じく、「収集不要な」(39~42ページ)文書が公文書移管基準に明記されている。

「第二章 さまざまな資料をアーカイブする」では、まず「1 暮らしの中のアーカイブ」(大西愛)が、家庭における私文書、役所以外でも学校などに保存されている身近な公文書、そして被災時における資料の救済とその一助としての登録文化財について解説している。家庭内の資料は、分量が限られていた戦前期には丁寧に保存されることが多かったが、現在では情報の洪水の中で安易に捨てられがちであるの

で、各個人は、残すべき文書を、「資料保存の4原則」(①出所、②現秩序尊重、③原型保存、④記録)に従って意識的に決めるのが望ましいこと、さらに、外国にしばしば存在する私文書を寄贈できる公的機関または委託のシステムが必要であることが提言される。そして、法律で公文書を残すことが義務つけられている学校や、被災した古民家などが貴重な文書の宝庫であることが、著者の経験に基づき説得的に示されている。

同章「2 資料のかたちはいろいろ」(平井洗史)は考古学専攻の著者が、資料の保管という点でアーカイブと共通するところが多い考古資料を題材にして、それを「取り巻く問題についてアーカイブズおよび文書管理と比較しながら考えて」(62ページ)いく。紙媒体を扱うアーカイブと違って土製品をはじめとする多様な素材から成る考古資料は、収納用具も様々であり、資料のライフサイクルに関しても、残される資料が半永久的に保管され、選別がなされるという点で共通しているものの、選別の過程が異なり、考古資料の整理にのみ接合や復元がみられる、といった差異があること、すでにふれた資料保存の4原則中、④記録を除く3つの原則と照らしてみれば、考古資料では公開・利用優先のため効率化・合理化が優先され、とくに③原型保存に直接かかわる資料の復元が日常的に実施されるために、諸原則が満たされない嫌いがあること、また、考古資料の調査過程で作成される図面・メモ・写真などの二次資料が失われがちであることなどが紹介されたのち、アーカイブと考古資料に共通する。専門的な人員、および資料の保存スペースの不足という問題が指摘される。

コラム「私のファミリーヒストリー—個人で先祖さがしをやってみた」(武田浩子)は、1世紀前に渡米した筆者の一血縁者の歩みを内外のアーカイブから探った体験が興味深く記されている。ここからは、日本のアーカイブでは個人情報保護の壁が高く、またインターネット上のホームページの設計があまり良くないために、成果が乏しかったのに対して、アメリカの大学アーカイブ、ウェブサイト、博物館の情報提供が素晴らしいことがうかがわれる。

第3章「21世紀のアーカイブの潮流」(小川千代子)では、アーカイブの概念の変遷が丹念に考察される。西欧のアーカイブ(文書館)は、明治期から「アルチーフ」「アルカイヴ」

などの名称で紹介され、それらの未実現が嘆かれていた。長らく続いたそうした状態が変化し始めたのは1980年代であった。それと並行してコンピュータが急速に普及する中で、入力情報を消えないよう保存するという意味での(デジタル)アーカイブなる語が、政府の支援もあって広く使われるようになった。しかし、それには、戦略的産業としてのITの発展による経済成長を期待するといった政治色が濃厚であって、本来の意味での文書館は視野に入っていなかった。世界の動きに目を転じると、2016年にソウルで開催されたICA(国際文書館評議会)大会では「動詞『記録を保存する(こと)』⇨アーカイブ(アーカイビング)、及び名詞『保存記録』⇨アーカイブ(ズ)を個別に意識する傾向」(109ページ)が明確にされたが、これこそ21世紀におけるアーカイブの新潮流に他ならず、その象徴が同じ会議でT.ピーターソンによって提起された「人権の観点から世界規模でアーカイブ資料を守る試み」「セーフ・ヘブン」(同ページ)であった。著者の小川氏によれば、「アーカイブとは、情報を固定化する動作であり、同時に固定化された保存情報=保存記録であり、さらにはその集合を保存する場所=記録保存館やその仕事を担う役所=記録管理院(文書館が日本でほとんど認知されていなかった1997年に著者が文書を残すために構想した国家機関—引用者)」(113~14ページ)である。アーカイブはもともと権力者が統治のために残した記録の集成であったし、現在でもその側面を持っている。そして、そうした目的も時の経過とともに変化していくのではあるが、資料を「保存する」という「本来の意味を置き去りにしてはならない」(121ページ)、と結ばれている。

第4章「アーカイブを維持する修復技術」(金山正子)は、アーカイブの修復を専門とする著者が資料の修復について詳しく、わかりやすく解説している。まず、近代以前の日本の古文書の劣化損傷とそれへの対応が述べられる。和紙と墨と糊という世界に誇るべき安定した素材で作られている古文書も、害虫、そして東アジア特有の湿気という大敵があるという説明ののち、世界で公表されている保存修復の4原則(原型、可逆性、安全性、記録)を守りつつ行われる紙資料の修復技術が詳細に紹介される。続いて、ある資料群の保存に当たっては、サンプリング調査を通じてどの面でいかなる程度劣化が進んでいるのかを見極め、修復の計画を立

る必要があるが、紙の劣化を診断する有効な方法が、人間の五感を活かす官能検査であるとされる。以下、和紙に代って多様な記録素材を用いるようになった近現代の資料の多くが劣化しやすく、危険な状況にあること、150年前の火災で蒸し焼きになり炭化した古文書でもバキューム・フリーズ・ドライ法やデジタル化の活用によって、書かれた文字の判読が可能であること、絵図面の補修を通じて、貼紙に隠されていた古い時期の地図が復元されうること、2014年以降著者も参画したバチカン図書館でのキリタン文書（「マレガ文書」）の修復事業を通じて、日本の古文書修復の技術がEU圏にも知られつつあることが紹介され、「歴史資料を修復する際にもっとも心がけなければならないことは、手を加えすぎず必要最小限の処置にとどめるといふこと」（165-66ページ）、「修復家の財産となるのは修復記録である」（168ページ）が、その保管がきちんとされているとは言い難いこと、世界の潮流であるデジタル化と、アーカイブが目指す原本の保存とをどう折り合いをつけていくのかが重要であること等が論じられる。著者の幅広い関心と資料修復にかける情熱が伝わってくる章である。

コラム「世界のアーカイブ修復保存の現場から」（金山正子）はイタリア、北米、オーストラリア、ドイツでの資料の修復保全の現状が簡潔ながら興味深く紹介されている。

第5章「科学技術・国際機関のアーカイブ」は内外の特色あるアーカイブの事例を紹介している。「1 セルン施設とアーカイブ」（平井洸史）は、スイス、フランスの両国にまたがって設置されたセルン（欧州素粒子原子核研究所）の研究施設、展示施設、見学ツアーにつきふれたのち、セルンのアーカイブの沿革および組織のあり方、保管されている資料の性質やアクセス環境などについて詳説したのち、研究者を中心に約2,500人ものスタッフを擁するにもかかわらずアーキビストが極端に少ないこと、セルンが巨大でありながら他機関と密接に交流する機関であるため、資料の帰属の決定が難しく、科学的記録と行政的記録との線引きも困難なことなどの問題を指摘している。

「2 仁科記念財団、仁科芳雄記念室の見学レポート」（小川千代子）では、理化学研究所の発祥の地、東京都文京区にあり、2年後の移転が決定している仁科芳雄記念室を著者が訪問した際、原子物理学者仁科の研究室の什器類に

貼られたラベルから、アーキビストからみて資料がほぼ完璧に整理されていることを確認したという経験が感動的に語られている。

「3 国際連盟に届いた日本脱退の電報」（小川千代子）では、1933年3月に日本政府が国際連盟に宛てた連盟脱退の意思を表す電報の原文を、著者が国際連合アーカイブ室で閲覧し、その後、日本の外務省外交史料館で探したところ、発信した電報自体は見つからなかったものの、調査の過程で外務省が戦前すでに電報発信の部署を持っており、今日いうところのイントラネット型の情報通信網を独自に整備していたのを認識した、と述べられている。

コラム「国連高等弁務官事務局（UNHCR）でアーカイブを守る人々」（大西愛）では、本書の執筆者たちが10年間ボランティアで資料整理を行ってきた、UNHCRのアーカイブ課に勤務している人々の仕事ぶりがアンケート調査の結果を通じて紹介されている。

「おわりに—これからのアーカイブに向けて」（小川千代子）では、著者が第3章ですでに言及していたデジタル・アーカイブへの疑問を解決してくれるアイデアとして、2016年に来日した中国の馮惠玲教授が提唱し、同国ではすでに実現している「デジタル・メモリー」という考え方が紹介される。「アーカイブ資源開発」とも言い換えられているそれは、「研究者なり、特定のテーマを持つアーカイブ利用者が、図書館や博物館も含めて資料を横断的に渉猟し、その成果を踏まえて新たなデジタル著作物を作り出すこと、と理解でき」、NHKの「ファミリーヒストリー」が「類似の手法を用いた事例」とされている（219ページ）。そして、日本では政府の肝煎りでIT戦略と景気浮揚の実現を目指して多用されてきたデジタル・アーカイブにも、アーカイブ本来の目的である「証拠性の高い記録物や情報資源の確実な長期保管」（222ページ）という観点をしっかり認識してもらうことの必要性が喚起される。

以上、蕪雑な内容紹介ながら、公文書管理を中心にアーカイブをめぐる多面的で有益な論議に満ちた本書は、アーカイブに関心を持つ人々に広く読まれるべき好著である。

最後に、評者が本書を通読して感じたことをいくつか述べたい。まず、公文書管理法によって文書の評価選別を行うのがアーキビストではなく行政機関の長とされたが、それ以来地方自治体の公文書館においても同様の規則が広がっ

ているようである。このこと自体、第一章で指摘されている「行政による恣意的な文書廃棄の危険性」(10ページ)が公文書館にもあてはまることを意味している。アーキビストが、残すべき文書を決定できるという国際的常識が、日本にもいつかは定着してほしいものである。

日本政府は、アーカイブの最も重要な役割が資料の保存であることを理解していない結果、近年の公文書の安易で恣意的な廃棄、改竄、さらに不正な統計の作成といった一連の不祥事を引き起こしてきた半面、成長産業であるITの振興、それと関わる景気浮揚という短期的・実利的観点のみからデジタル・アーカイブズ論を推進してきた。アーカイブをめぐるこうした政策の混迷の根底には、世界的リーダーであれば当然備えているべき教養が日本の政治家や官僚には欠落しているという情けない事実がある。あるレベルの役職への就任にあたって、彼らにはアーカイブに関する研修を義務付ける必要がある。

るのではなからうか。

他方で国立公文書館等や地方自治体のアーキビストたちは、このようなお粗末な施策に大きく関連する貧弱な予算と少ない人員にもかかわらず、公文書を守るべく日々努力している。そうした人々が限られた時間内に大量の文書の評価選別を行う上で、第一章(2)(3)がともに紹介している「引き継がない」あるいは「収集不要」文書の規程は確かに有益であろう。

なお第二章の「コラム」には共感する点が多かった。最近、資料のデジタル公開が多くアーカイブで進んでいるのは大変結構なこととは思いますが、とくに官公庁関連のウェブサイトに、知りたいコンテンツまでなかなか到達できず、利用者にはなはだ不親切なケースが多いのに対して、欧米のデジタル・アーカイブズの方が、英語さえ理解できれば日本人であっても、はるかに活用しやすいように感じられる。

大阪大学社会学共創連続セミナー第4回 「地域の記録を守り伝えるー公文書館の課題と未来ー」の開催

2019年3月18日14時～17時、大阪大学会館21世紀懐徳堂スタジオで、大阪大学社会学共創連続セミナー第4回「地域の記録を守り伝えるー公文書館の課題と未来ー」を開催しました。主催は大阪大学共創機構社会学共創本部、企画制作は大阪大学アーカイブズ/大阪大学21世紀懐徳堂でした。大阪大学共創機構社会学共創本部の「地方自治体における公文書管理と保存クラスター」の一環として企画しました。プログラムは下記(敬称略)の通りです。

開会の挨拶 永田靖(大阪大学副学長・社会学共創本部長)

基調講演

伊藤一晴(国立公文書館公文書専門官)

「アーキビストの職務基準書」の作成経緯と概要」

三輪宗弘(九州大学附属図書館付設記録資料館教授)

「何を残すべきなのかー熊本県公文書への私のチャレンジと日本への提言ー」

矢切努(中京大学法学部准教授)

「地方校公共団体における公文書館の現状と課題ー公文書専門職の経験を通じてー」

パネルディスカッション「地方公共団体の公文書保存は、今」

登壇者

伊藤一晴、三輪宗弘、矢切努

コーディネーター

高橋明男(大阪大学アーカイブズ室長、法学研究科教授)

当日は42名の参加者を得ました。アーキビスト職務基準、保存文書選別など、地方公共団体の公文書保存の現状と課題を討論し、大学と地方公共団体、公文書館の共創によって社会に何をもたらすことができるか、その可能性を探りました。当日の資料は、大阪大学機関リポジトリOUKAにアップされています(<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>)。



パネルディスカッション「地方公共団体の公文書保存は、今」の様子(2019年3月18日)

受贈刊行物 (2019年3月～8月)

愛知大学東亜同文書院大学記念センター「東亜同文書院」愛知大学 創成の軌跡(パンフレット)、霞山会、愛知大学主催 Think Asiaーアジア理解講座シンポジウム 日中関係の未来図ー歴史から考えるー(チラシ)、東亜同文書院記念基金会ニュース 第19号、同文書院記念報 VOL.27

追手門学院大学学院志研究室 学院志研究室 News Letter 第10号

大阪商業大学比較地域研究所 大阪商業大学比較地域研究所 Milepost 第36号、地域と社会 第21号

大阪市立大学大学史資料室 大学史資料室ニュース 第23号、大阪市立大学の歴史 1880年から現在へー大学は都市とともに、都市は大学とともにー

大谷大学真宗総合研究所 2018 真宗総合研究所 研究紀要 36、大谷大学真宗総合研究所 研究所報 No.73・74

学習院大学 GCAS Report Vol.8、学習院大学大学院人文科学研究科 アーカイブズ専攻 令和元年入試説明会 アーキビストを志す。(チラシ・ポスター)、記録を守り 記録を伝える 2019.7.1、学習院アーカイブズ ニュースレター vol.14

神奈川大学資料編纂室 神奈川大学史紀要 第4号

金沢大学資料館 金沢大学 資料館だより Vol.59、金沢大学資料館紀要 第14号

関西学院 ベーツ宣教師の挑戦と応戦、関西学院史 紀要 第二十五号

関西大学年史編纂室 2019年度 関西大学年史資料展示室企画展 関西大学の学生運動(チラシ・パンフレット)、関西大学 法政大学 明治大学 三大学連携協力協定締結記念特別展示 ポアソナードとその教え子たち(チラシ)、関西大学年史紀要 第26号

関東学院学院史資料室 関東学院 学院史資料室 ニュース・レター No.22

九州大学 九州大学大学院統合新領域学府 ライブラリーサイエンス専攻 年報2018/2019、九州大学 大学史料叢書 第25輯 小野寺直助留学日記 二、九州大学 大学文書館ニュース 第42号

京都産業大学 サギタリウス vol.83・84

京都大学大学文書館 京都大学 大学文書館だより 第36号、京都大学大学文書館 企画展 この地に百三十年ー吉田キャンパス成立史ー(チラシ)、京都大学大学文書館研究紀要 第17号、京都大学大学文書館資料叢書1 羽田亨日記

慶應義塾福澤研究センター 慶應義塾福沢研究センター 近代日本研究 35、「慶應義塾と戦争」アーカイブズ・プロジェクト 大阪特別企画展Ⅱ 忘れられた戦争のカケラ(冊子・チラシ)

皇學館大学研究開発推進センター 皇學館大学研究開発推進センター紀要 第5号、平成28年度 皇學館大学研究開発推進センター年報 第5号

神戸女学院史料室 学院史料 Vol.32、學報 NO.185

國學院大學研究開発推進機構校史・学術資産研究センター 校史 Vol.29、國學院大學 校史・学術資産研究 第十一号、國學院大學博物館 企画展 有栖川宮家・高松宮家 ゆかりの新収蔵品(チラシ)

国士館史資料室 国士館史研究年報 楓原 第10号 国士館大学創設60周年記念

駒澤大学禅文化歴史博物館 駒澤大学禅文化歴史博物館紀要 第3号(平成29年度)、駒澤大学禅文化歴史博物館 企画展 新収蔵品展2018、駒澤大学禅文化歴史博物館 企画展 家康を支えた一門 松平家忠とその時代 ～「家忠日記」と本光寺～(ポスター・パンフレット)、駒澤大学禅文化歴史博物館企画展 東日本の須臾器ー駒澤大学の考古学ー(チラシ・ポスター)

滋賀大学史編集委員会 写真でみる滋賀大学の歴史 滋賀大学創立70周年記念誌

淑徳大学アーカイブズ 淑徳大学 アーカイブズ・ニュース VOL.19

静岡大学人文社会科学部大学アーカイブズ委員会 静岡大学人文社会科学部所蔵 旧制静岡高等学校・静岡大学大岩校舎関係写真帳 第2集

女子美術大学歴史資料室 関連イベント 佐藤志津没後100年記念講演会、佐藤志津没後100年記念展 佐藤志津と私立女子美術学校(冊子・チラシ・ポスター)、TEXNH MAKPA 女子美術大学歴史資料室ニュースレター 第12号

成城学園教育研究所 成城教育 第183・184号

西南学院 西南学院百年史、西南学院史資料センター通信 一粒の麦 NO.2、西南学院史資料センター企画展 『西南学院百年史』刊行記念ー『百年史』編纂で発見された史実(パンフレット)

専修大学大学史資料課 専修大学史紀要 第11号

大東文化歴史資料館 大東文化大学史研究紀要 第3号、大東文化歴史資料館だより 第26号

玉川大学教育博物館 玉川大学教育博物館 紀要 第16号

多摩美術大学 多摩美術研究 8、多摩美術大学研究紀要 第33号

筑波大学アーカイブズ 筑波大学アーカイブズ年報 第2号

東海大学学園史資料センター 東海大学資料叢書7 新制東海大学設立認可申請書類(上)、東海大学 学園史ニュース No.13、東海大学 七十五年史 編纂だより 第5・6号

東北学院東北学院史資料センター 東北学院史資料センター年報 Vol.4

東北大学史料館 東北大学史料館だより No.30、東北大学史料館紀要 第14号

東洋英和女学院 東洋英和女学院学院報 楓園 No.88、史料室だより No.92、東洋英和楓の会からのお知らせ(チラシ)

東洋大学井上円了研究センター 井上円了センター年報 Vol.27

東京学芸大学大学史資料室 東京学芸大学 大学史資料室報 vol.6

東京女子大学 東京女子大学100年史(本編・資料編)

東京大学文書館 東京大学文書館紀要 第37号、東京大学 文書館ニュース vol.62

同志社社史資料センター 新島研究 第110号、同志社談叢 第三十九号、同志社大学 同志社社史資料センター報 第15号、ハリス理化学館同志社ギャラリー 第18回企画展 新島家と安中藩ー安中古文書学習協議会の翻刻成果の公開ー(チラシ・ポスター)、ハリス理化学館同志社ギャラリー 第19回企画展 岸和田城企画展 近代の夜明けとキリスト教ー岸和田と同志社(チラシ・ポスター)

獨協学園獨協学園史資料センター 第6回企画展 獨逸学協会学校 初代校長 西周ー生誕百九十年記念ー(チラシ)

富山大学アーカイブズ設置検討準備室 富山大学アーカイブズ・ニュースレター 第6号

長崎大学 Choho 長崎大学広報誌 Vol.67・68

名古屋大学大学文書資料室 名古屋大学 大学文書資料室ニュース 第36号、名古屋大学 大学文書資料室紀要 第27号

南山アーカイブズ アルケイアー記録・情報・歴史ー 13、南山アーカイブズニュース 11号、南山学園史料集 14 聖園女学院資料集、第3回南山アーカイブズ企画展 南山大学の設置ー名古屋外国語専門学校から南山大学へ(チラシ・ポスター)

日本女子大学成瀬記念館 成瀬記念館 2019 No.34、成瀬仁蔵関係書簡集1

日本大学 日本大学 大学史ニュース 第16・17号、令和元年度日本大学文学部資料館展示会 日本大学 130年の軌跡 ―明治から令和へ―(チラシ)

一橋大学創立150年史準備室 一橋大学創立150年史準備室 NEWSLETTER No.5

広島大学 広島大学文書館蔵 延岡慶啓関係文書目録、広島大学文書館紀要 第21号、広島大学高等教育研究開発センター コリール No.52

弘前大学 弘前大学七十年史 通史・史料編

フェリス女学院資料室 フェリス女学院資料室紀要 あゆみ 第72号

法政大学大原社会問題研究所 法政大学大原社会問題研究所環境アーカイブズ ニュースレター 第4号

北海道大学 北海道大学150年史編集ニュース 第3号、北海道大学大学文書館年報 第14号

武蔵学園記念室 武蔵学園史年報 第22号

明治学院歴史資料館 明治学院歴史資料館資料集 第15集 昭和三〇・四〇年代の明治学院音楽事情座談会

明治大学史資料センター ニュースレター 明治大学史 No.15、大学史紀要 第25号

桃山学院史料室 桃山学院の歴史 2019、桃山学院年史紀要 第38号、桃山学院史料室(リーフレット)、2019年度 泉大津市・大学連携事業 東京2020応援プログラム 企画展 世界へ羽ばたく! 泉州のアスリート(チラシ)

立教学院 立教学院史研究 第16号、立教ディスプレイ 立教学院展示館年報 Vol.4、日本における聖公会の教育機関・関連施設―その創立と現在― 日本聖公会関係学校展(チラシ)

立正大学史料編纂室 立正大学史紀要 第4号、立正大学史料編纂室の葉 vol.5

立命館史資料センター 立命館 史資料センター紀要(第二号)

秋田県公文書館 秋田県公文書館だより 第34号、古文書倶楽部第88号

安曇野市文書館 安曇野市文書館だより 第2号

池田市教育委員会生涯学習推進課 新修 池田市史 第一～五巻・別巻、池田市史 史料編⑩・⑪

大阪府公文書館 大阪あーかいぶず 第54号

岡山県立記録資料館 岡山のアーカイブズ 8 ～記録資料館活動成果資料集～、岡山県記録資料叢書14 岡山県明治前期資料五 (十八～二十年)、岡山県立記録資料館 紀要 第14号

沖縄県公文書館 ARCHIVES 沖縄県公文書館だより 第57号、沖縄県公文書館研究紀要 第21号、琉球政府文書デジタルアーカイブ 琉政だより NO.09

小布施町 小布施町文書館だより Vol.9

外務省外交史料館 外交史料館報 第32号

香川県立文書館 香川県立文書館紀要 第22号、香川県立文書館収蔵文書目録 第21集 讃岐国三野郡財田中村 大矢家文書目録(4)、香川県立文書館 開館25周年記念企画展 讃岐を治めたお殿様の手紙(チラシ)、平成31年香川県立文書館企画展示 学校のアーカイブズ2 ―小豆島高校・土庄高校・観音寺中央高校・三豊工業高校―(チラシ)

神奈川県立公文書館 平成30年度 神奈川県立公文書館年報、神奈川県立公文書館だより 第40号

京都府立京都学・歴史館 京都学・歴史館紀要 第2号

宮内庁書陵部 書陵部紀要第70号、昭和天皇実録人名索引・年譜

国立公文書館 北の丸 ―国立公文書館報― 第51号、国立公文書館ニュース Vol.17・18、平成31年 春の特別展 江戸時代の天皇(チラシ・ポスター)、令和元年度 第1回企画展 紙に願いを ―建白・請願の歴史―(チラシ・ポスター)、令和元年度 第2回企画展 雨に詠えば ―空模様の古典文学―(チラシ・ポスター)

埼玉県立文書館 埼玉県史料叢書22 小室家文書 一 三代小室元長日記、収蔵文書目録第57集 青木家文書目録、文書館紀要 第32号、埼玉県立文書館 2019.4.2(火)リニューアルOPEN(チラシ・ポスター)

相模原市立公文書館 公文書館年報(平成30年度の運用状況報告)、相模原市立 公文書館だより 第9号

札幌市総務局行政部公文書館 札幌市公文書館年報 第6号 年報編・研究論考編 平成30年度

寒川文書館 寒川町史研究 第30号

滋賀県県民生活部県民活動生活課県民情報室 滋賀のアーカイブズ 滋賀県県政史料室だより 第6号

太宰府市公文書館 太宰府市公文書館紀要 第13号、太宰府市公文書館報 平成30年度、太宰府市公文書館通信 vol.1・2

東京都公文書館 東京都公文書館だより 第34号

栃木県立文書館 栃木県史料所在目録 第47集 永井峯三家文書、栃木県立文書館 研究紀要 第23号、文書館だより 第61号

長野県信濃美術館 休館中だけお届けする信美休館通信 Vol.1、長野県信濃美術館 東山魁夷館 二〇一九年十月五日土曜日リニューアルオープン(チラシ)、東山魁夷館 リニューアルオープン記念展(パンフレット)

長野県立歴史館 長野県立歴史館 研究紀要 第25号、催しもの案内(リーフレット)、2019年長野県立歴史館巡回展 長野県の考古学―時代を映す“匠”の技(チラシ・ポスター)、開館25周年記念 収蔵品展 長野県立歴史館の名品(チラシ・ポスター)、開館25周年記念 秋季企画展 戦国 小笠原三代 ―長時・貞慶・秀政―(チラシ・ポスター)、信毎出版ニュース 信州を学ぶ 視野を育てる編―長野県立歴史館編 広い世界とつながる信州(チラシ)、信毎出版ニュース 信州を学ぶ 未来を創る編―長野県立歴史館編 新たな時代にはばたく信州(チラシ)、長野県立歴史館だより 2019年 vol.98～100、長野県立歴史館開館25周年を彩る企画展 長野県立歴史館の名品(チラシ・ポスター)、長野県立歴史館収蔵文書目録 18

長野市公文書館 市誌研究ながの 第26号

長野市総務部庶務課 長野市公文書館(便り) Vol.34～37

新潟県立文書館 新潟県立文書館年報 第27号 平成30年度

新潟県歴史資料保存活用連絡協議会 新史料協だより No.24

新潟市文化スポーツ部歴史文化課 新潟市歴史資料だより第27号

広島県立文書館 広島県立文書館紀要 第14号、広島県立文書館だより NO.43

福井県文書館 福井県文書館研究紀要 第16号、福井県文書館資料叢書14 福井藩士履歴7 子弟輩、福井県文書館年報 第16号 平成30年度

福岡共同公文書館 福岡共同公文書館 令和元年度 第一回企画展 学校給食ヒストリー(チラシ・ポスター)

福岡市総合図書館 福岡市総合図書館 研究紀要 第19号、平成30年度 古文書資料目録 24

福島県文化振興財団 福島県史料情報 第53・54号、福島県歴史資料館収蔵資料目録 第50集 県内諸家寄託文書(44)

藤沢市文書館 歴史をひもとく藤沢の資料 4 湘南台地区

北海道立文書館 水ぬれ資料を救おう ―被災資料の救出と日頃の備え― 2018(平成30)年度文書等保存利用研修会記録、赤れんが 北海道立文書館報 No.54

松本市文書館 松本市史研究 ―松本市文書館紀要― 第29号

山口県文書館 山口県文書館研究紀要 第46号、文書館ニュース No.53

和歌山県立文書館 古文書徹底解釈 紀州の歴史 第六集 夜分火を焚き酒食を用い、和歌山県立文書館だより 第54・55号、和歌山県立文書館紀要 第21号

エス・ピー・シー 大洲城下物語 大洲城誕生の謎から幕末維新の

群像、平成の復元まで

核融合科学研究所創立30周年記念事業事務局 核融合科学研究所 三十年史

旧制高等学校記念館 松本高等学校 開校100年記念誌 松本高等学校の思い出と現在の活動について、記念館だより 第77・78号、学都松本ミュージアムめぐり 2019(チラシ・ポスター)、松本高等学校開校100年記念 第24回 夏季教育セミナー(チラシ・ポスター)

国文学研究資料館 史料目録 第106集 佐渡国加茂郡原黒村鶴飼家文書目録(その2・完)、史料目録 第107集 信濃国埴科群松代伊勢町八田家文書目録(その10)、史料目録 第108集 信濃国埴科群松代伊勢町八田家文書目録(その11)、史料目録 第109集 秋田県北秋田郡大館町中田家文書目録、ブックレット<書物をひらく> 18 オーロラの日本史 古典籍・古文書にみる記録、ブックレット<書物をひらく> 19 御簾の下からこぼれ出る装束 王朝物語絵と女性の空間、2019年度 アーカイブズ・カレッジ 史料管理学研究会、ないじえる芸術共創ラボ いま、古典籍の森で、ふみ「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」ニューズレター 第12号

大紀アルミニウム工業所 DIK70 大紀アルミニウム工業所70周年記念誌

帝国データバンク史料館 TEIKOKU DATABANK HISTORICAL MUSEUM Muse Vol.34・35

ニチバン株式会社 ニチバン100年史

日本鉄鋼連盟 鉄鋼十年史 ー平成20年度～平成29年度ー

人と防災未来センター資料室 阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター 資料室(リーフレット)、資料室ニュース vol.68・69

わだつみのこえ記念館 《不再戦・平和》を発信するアーカイブ館 わだつみのこえ記念館 2018年(リーフレット)、わだつみのこえ記念館 記念館だより No.13

全国大学史資料協議会 大学アーカイブズの可能性 全国大学史資料協議会 東日本部会 創立30周年記念講演会・シンポジウムの記録

全国大学史資料協議会西日本部会 全国大学史資料協議会 西日本部会会報 No.35

全国大学史資料協議会東日本部会 大学アーカイブズ No.60

大阪大学経済学部同窓会 待兼山 第35号

大阪大学生生活協同組合 Campus Life Vol.58・59、Handai Walker No.185～187

本河光博 大阪大学 吟詩部三十五年の歩み、大阪大学 創立60周年記念同窓会誌 阪大春秋記念ビデオ

村松玄太 法律学校研究会成果報告書(JSPS科研費16K03060助成) 近代法胎動期における私立法学系高等教育の地域普及とその教育実態の系統的解明

菅 真城 公文書をアーカイブする ー事実記録されているー、大阪大学社会学共創叢書1 街に拓く大学 大阪大学の社会学共創、生産と技術 Vol.71 No.2 上・下巻、No.3 上・下巻

※大阪大学学内からの受贈省略

業務日誌(抄) (2019年3月～8月)

2019年

- ・ 3月4日 第12回アーカイブズ運営委員会を開催
- ・ 3月12日 菅教授(社会学共創本部、アーカイブズ兼任教員)、全国大学史資料協議会西日本部会2018年度第5回幹事会(関西学院大学大阪梅田キャンパス)に出席
- ・ 3月15～16日 菅教授、京都出張。デジタルアーカイブ学会第3回研究大会(京都大学)に出席
- ・ 3月18日 大阪大学社会学共創連続セミナー第4回「地域の記録を守り伝えるー公文書館の課題と未来ー」を開催
- ・ 3月20日 菅教授、企業史料協議会主催「ビジネスアーキビスト研修講座第4回関西開催」で「アーカイブズの立ち上げとアーキビストの役割」講義
- ・ 4月8日 全学共通教育「大阪大学の歴史」開講。菅教授、「概観」講義
- ・ 4月17日 菅教授、東京出張。第214回記録管理学会理事会(国立情報学研究所)に出席
- ・ 4月20～21日 菅教授、東京出張。日本アーカイブズ学会2019年度大会(学習院大学)に出席
- ・ 4月23日 菅教授、全国大学史資料協議会2019年度第1回幹事会(関西学院大学大阪梅田キャンパス)に出席
- ・ 4月30日～5月2日 国民の祝日に関する法律(昭和23年法律第178号)及び天皇の即位の日及び即位礼正殿の儀の行われる日を休日とする法律(平成30年法律第99号)に基づき臨時閉室
- ・ 5月11日 菅教授、日本図書館研究会情報組織化研究グループ2019年5月月例研究会(エル・おおさか)に出席
- ・ 5月14日 医学研究科総務課庶務係から元総長の写真について照会
- ・ 5月15日 人間科学研究科教員から元教員の業績に関して照会

- ・ 5月23日 杉山英夫氏から資料受贈
- ・ 5月25～26日 菅教授、柏出張。記録管理学会2019年研究大会(東京大学柏キャンパス)に出席
- ・ 5月28日 菅教授、高松出張。令和元年度香川県立文書館運営協議会(香川県立文書館)に出席
- ・ 6月3日 菅教授、全学共通教育科目「大阪大学の歴史」で「大阪帝国大学の創立と理学部の新設」講義
- ・ 6月6日 菅教授、東京出張。令和元年度「国際アーカイブズ週間」記念講演会(ベルサール九段)に出席
- ・ 6月7日 高橋室長、菅教授、東京出張。令和元年度全国公文書館長会議(ベルサール九段)に出席
- ・ 6月14日 菅教授、全国大学史資料協議会西日本部会2019年度総会・第1回研究会(追手門学院大学)に出席
- ・ 6月15日 菅教授、京都出張。全国歴史資料保存利用機関連絡協議会近畿部会第27回総会・第151回例会(京都府立京都学・歴史館)に出席
- ・ 6月18日 菅教授、東京出張。第215回記録管理学会理事会(国立情報学研究所)に出席
- ・ 6月21日 西南学院大学から自校史教育について照会
- ・ 6月24日 菅教授、全学共通教育「大阪大学の歴史」で「旧制高等学校から阪大共通教育へー大阪高等学校、浪速高等学校ー」講義
- ・ 7月1日 菅教授、全学共通教育「大阪大学の歴史」で「戦争と大阪大学」講義
- ・ 7月9日 菅教授、全国大学史資料協議会西日本部会2019年度第2回研究会(関西大学)に出席
- ・ 7月29日 菅教授、全学共通教育「大阪大学の歴史」で「歴史を学ぶ、歴史に学ぶ」講義
- ・ 8月5日 菅教授、全学共通教育「大阪大学の歴史」で「補足と試験」講義
- ・ 8月13～15日 夏季一斉休業のため臨時閉室

大阪大学アーカイブズ利用案内

・開室日

次に掲げる日を除く毎日

- (1) 日曜日及び土曜日
- (2) 国民の祝日に関する法律（昭和23年法律第178号）に規定する休日
- (3) 12月29日から翌年の1月3日までの日

・利用時間

午前9時30分～午後4時30分

・利用請求の受付

午前9時30分～正午、午後1時～午後4時

大阪大学アーカイブズ構成員名簿

室長 高橋 明男（法学研究科・教授）

〈兼任教員〉

【法人文書資料部門】

菅 真城（共創機構社会学共創本部・教授）
瀧口 剛（法学研究科・教授）
三阪佳弘（高等司法研究科・教授）
藤本慎司（工学研究科・教授）
阿部浩和（サイバーメディアセンター・教授）
安岡健一（文学研究科・准教授）
中村征樹（全学教育推進機構・准教授）

【大学史資料部門】

菅 真城（共創機構社会学共創本部・教授）
飯塚一幸（文学研究科・教授）
田口宏二郎（文学研究科・教授）
廣田 誠（経済学研究科・教授）
進藤修一（言語文化研究科・教授）
松永和浩（共創機構社会学共創本部・准教授）

〈事務担当〉

大阪大学総務部総務課文書管理室



大阪大学アーカイブズニュースレター 第14号

発行日 2019年9月30日
編集発行 大阪大学アーカイブズ
〒562-8558
大阪府箕面市粟生間谷東8-1-1

Tel. (072) 730-5113
Fax. (072) 730-5114
E-mail office@archives.osaka-u.ac.jp
http://www.osaka-u.ac.jp/ja/academics/facilities/ed_support/archives_room